SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

「呉鳳伝説」の朝鮮的な受容：植民地文化研究のための覚え書き

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 静岡大学人文学部
	公開日: 2008-01-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 南, 富鎮
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000490

「呉鳳伝説」の朝鮮的な受容
――植民地文化研究のための覚え書き――

南　富　鎮

一、はじめに

個人的なことから話そう。たまに頭をよぎるふとした記憶がある。自分の生き方、あるいは人生を考えるたびにその記憶は表に出てくる。韓国での高等学校一年生用の国定教科書国語で教わった「いかに生きるか」という表題のことである。[1] つまり、自分がいかに生きていくかを考える度毎に、高校時代に教わった「いかに生きるか」という教科題目が思い出されるのである。その内容は台湾の首狩族をめぐる呉鳳の話である。呉鳳の話が強烈な思春期の記憶として人生観と異様な形で結びついている。ある種の狭雑物として自分の思考に付着しているのである。学校教育が残した効果であろうか。とはいえ、こうした思考現象は私だけに限るものでもなかろう。二〇〇二年韓国で、『読み返す国語〔高等学校〕』という題で、もっとも感動的な高等学校国語の教科目とされるものがまとめられたが、そこにも「いかに生きるか」は青春の郷愁をそそる話として再録されている。[2] 編者は、「時たま、いかに生きるのが正しいのか、自分に問い直す。思春期に入ったばかりの高校生のとき、この文章から正しい生き方について考えさせられた。おそらくそれで一層記憶に残る文章かもしれ

ない」という。

本論はこうした個人的な思いから出発した一種の植民地文化論である。「呉鳳伝説」[3]が残した朝鮮においての受容の問題をたどるのが本論の目的になる。その過程で呉鳳伝説をめぐる朝鮮での受容と変容にかかわる植民地主義の政治性を紹介する。そして全体として植民地における文化研究のための、問題提起のひとつの覚え書きにしたい。

二、呉鳳伝説の変容過程

まず、「呉鳳」について簡略に紹介する。「呉鳳」は、戦前（あるいは戦後にかけて）日本・台湾・朝鮮の小学校（台湾の公学校、朝鮮の普通学校）国語教科書に掲載された話である。それぞれには若干の相違があるが、おおむね共通する話は次のようなものである。

昔、台湾の先住民には首狩の風習があったが、亜里山の先住民はいち早くその風習を止めた。それは呉鳳のお陰であった。呉鳳はその地域の役人で亜里山の先住民にたいへん尊敬されていた。呉鳳は首狩という野蛮な風習をなんとか止めさせようとしたが、先住民はどうしてもそれだけは聞かない。ちょうど先住民がすでに取ってある首が四〇余りあったのでそれを毎年の祭りに提供してきた。四十年余りがすぎ、いよいよ提供する首がなかったので、一年間だけ延ばしてくれといってそれを三年間繰り返した。しかし、先住民はこれ以上は待っていられないと強く首狩の実施を要求する。先住民の要求に窮した呉鳳は、某日何時に或る場所に行けば、赤い帽子をかぶって赤い服を着た通行人が通り過ぎるのでその人の首を狩るようにと指示する。先住民が言われた通りに指定の場所に行って首を刈ると、それは他でもない呉鳳であった。先住民はそれに驚き、以後は二度と首狩をしないと誓い、呉鳳の廟を建てて祭ったという。

以上のような話が、かつての戦前に、日本・台湾・朝鮮の国語教科書にそれぞれ掲載され、広まった呉鳳の話である。教科書を通したこうした認識が日本をはじめ、旧日本植民地の共通認識として、戦後の長きに渡り、続いてきたのである。

呉鳳に関する議論は一九八〇年代の初め、台湾で始められ、多くの研究成果が重ねられてきた。こうした議論を踏まえ、台湾政府は戦後までに続いた呉鳳教育による差別的で植民地主義的な側面を批判し、教科書から削除することを決める。それ以降もさまざまな研究による呉鳳伝説の変容過程が明らかになってきたが、なかでも呉鳳伝説の変容過程については、従来の論文をまとめた形になっている駒込武「植民地教育と異文化認識――「呉鳳伝説」の変容過程」――」に詳しい。(4)以下、駒込論を参考にして台湾における呉鳳伝説の変容過程を紹介する。

呉鳳伝説の原型は中田直久『殺身成仁通事呉鳳』（以下、『通事呉鳳』と略す）であると一般的にいわれている。一九一二年東京の博文館で刊行されたもので、佐久間台湾総督の揮毫、大津蕃務本署長、亀山警察本署長、津田毅一嘉義庁長の序が寄せられている。著者の中田直久は嘉義庁警視課長である。『通事呉鳳』の刊行は、総督府の肝いりで実施された呉鳳顕彰事業の一環で行われたもので、当初から植民地の政策的意図の強いものであった。中田直久『通事呉鳳』によって呉鳳のイメージは定着し、それ以降聖典化されていくのである。『通事呉鳳』の典拠になっているのが劉家謀『海音詩』（一八五五年）や倪贊元『雲林県采訪冊』（一八九四年）などであるが、いずれも曖昧な表現が多く、『通事呉鳳』のような纏まった美談話ではない。つまり、以前の典拠が大きく曲げられ、あるいは著しく変えられ、『通事呉鳳』としてまとめられたのである。それを示すかのように、実際に『通事呉鳳』でも必ずしも美談話でない異伝が六つ、載せられている。それぞれの典拠本や異伝では、呉鳳が殺されたのではなく自殺をしたとか、あるいは蕃人に復讐を誓って闘ったという、美談話とは思えない部分が見られている。さらに多くの典拠本や異伝には共通して、呉鳳が殺され、家族が呉鳳にいわれた通りに紙人を焼き、先住民を呪う話が見られる。呉鳳の呪いによって先住民の間に疫病が発生し、死人が多く出たため、呉

鳳の霊を祭って鎮めたというのである。紙人に憑依した呉鳳の霊が原住民に祟りをもたらすモチーフである。こうしたモチーフは先述の『雲林県采訪冊』をはじめ、漢族の異伝ではとくに強調されているが、それが『通事呉鳳』や台湾総督府の『公学校国語教科書』では簡略化され、文部省『小学校国語』や朝鮮総督府『普通学校国語』に至ると、ついに消滅する。つまり、自己犠牲、「殺身成仁」のより完璧な美談に変わっていくのである。こうして新たに彩色された美談話、つまり「呉鳳伝説」というものが学校教育の場を通して日本を始め、台湾、朝鮮に広まったのである。

日本と台湾における呉鳳伝説の変容過程を詳細にたどった駒込は、「呉鳳伝説」の形成過程を次のように結論づける。

> 呉鳳伝説の変容過程は二重の換骨奪胎過程として表象される。対先住民戦争への漢族の動員を目的とした『通事呉鳳』編纂段階では呉鳳「伝説」を「伝記」として実体化すると同時に先住民の文化に対する偏見を拡大再生産するような潤色がなされた。さらに、この段階で創出された自己犠牲の構造・「英霊」化の論理は教材化段階で「紙人」のモチーフや「王法」の観念の削除という「マイナスの操作」により徹底される。先住民や漢族の文化はこうした呉鳳伝説の「美談」化に必要な限りで換骨奪胎的に利用されるのであり、歪んだ異文化認識の拡大再生産と自己犠牲の観念を中核とする「日本的」な「美談」の形成とが表裏一体の形で進行したのである。(5)

中田直久『通事呉鳳』によって「換骨奪胎」された呉鳳伝説は、台湾と日本の小学校国定教科書を通してさらに聖典化され、大日本帝国全体に広まっていくのである。駒込の調査によれば、日本と台湾における呉鳳に関する教材は以下のようなものがある。(6)

A、台湾総督府編纂教科書

(一)『公学校用国民読本』巻十一第二四課、一九一四年
(二)『公学校用修身書』巻四第四課、一九一四年
(三)『公学校用国語読本第一種』巻八第二五課、一九二四年
(四)『公学校修身書』巻四第一四課、一九二九年
(五)『公学校用漢文読本』巻六第一九課、一九三三年
(六)『公学校用国語読本第一種』巻八第一八課、一九四〇年

B、文部省編纂教科書

(一)『第二種尋常小学読本』自習用乙第二課、一九一七年
(二)『尋常小学国語読本』巻八第六課、一九二一年
(三)『尋常小学読本』修正版巻十一第二課、一九二二年
(四)『小学国語読本』巻八第三課、一九三九年

戦前期、教科書で登場した呉鳳伝説は日本の敗戦後もなお、国民党政府の国定教科書に長いあいだ掲載されつづけてきた。ようやくの一九八七年、台湾立法院は教科書から呉鳳伝説を削除する。削除理由というのは、「日本人が意識的にねじ曲げて、呉鳳の人格の崇高さを突出させ、対照的にツオウ族の人格をおとしめた。呉鳳を神化することで、原住民を醜化した」ことである。(7) 呉鳳伝説がもつ植民地主義、あるいは戦後国民党による政治性を認識したからであろう。つまり、呉

鳳伝説は日本占領期だけではなく、台湾内部の政治性にあいまって、またそうした内的要求から戦後においても生き続けていたのである。そしてここで問題にしたいのは、同様のケースが朝鮮・韓国にも見られることである。

三、呉鳳伝説の韓国・朝鮮における受容

前述の駒込論をはじめ従来、呉鳳伝説はおもに植民地台湾研究の一環として扱われてきた。呉鳳に関する先行論はほとんどそうである。そのため、呉鳳伝説がおもに日本と台湾の問題として一般的に理解されてきた。しかし、呉鳳伝説はじつは、朝鮮・韓国にも共通して存在していた。日本や台湾同様、朝鮮においても普通学校の教科書などで掲載されてきたのである。朝鮮総督府編纂の教科書、あるいは戦後の韓国文教部編纂教科書に掲載されている呉鳳伝説を扱ったものは以下のようなものがある。

㈠普通学校国語読本（一九二三年～一九二四年発行）第二次朝鮮教育令期　巻八第六課
㈡普通学校国語読本（一九三〇年～一九三五年発行）第二次朝鮮教育令改正期　巻八第十七課
㈢高等学校国語一（使用期間：一九七五年～一九八九年）第三・第四次教育課程（文教部）、一年生用、

上記のうち㈠は、日本の『尋常小学国語読本』（巻八第六課、一九二一年）を基本的にそのまま使ったものである。句点と読点における細微な相違はあるが、内容はほぼ同じである。巻八第六課という掲載順番も日本の教科書と同じである。戦前の植民地の教科書は日本の教科書の内容をそのまま使ったものが多く、呉鳳も日本からの影響で朝鮮の教科書に掲載

されたものと思われる。つまり、日本の国定教科書の内容を受容するかたちで呉鳳は朝鮮に紹介されてきたのである。となると、呉鳳伝説の朝鮮での受容は、台湾→日本→朝鮮という経路をたどったことになる。教材としての呉鳳伝説の重要な特徴は、それが日本→植民地（台湾、朝鮮）の一般的な経路ではなく、台湾→日本→植民地（台湾、朝鮮）という経路をたどっていることである。いわば、宗主国発信ではなく、植民地発信の教材だったのである。上記の㈡は㈠の継続で、内容はそのままである。

しかし、ここで注目したいのは㈢のことである。㈢の高等学校国語（一九七五年〜一九八九年）は戦後しばらく経っての、しかも割合近年にまで続いたものである。戦前の大日本帝国の美談話が、戦後の韓国国定教科書に再登場したのである。すでに述べたように、台湾でも呉鳳伝説は国民党の政治性と相俟って一九八七年までに続いている。とすれば、日本では帝国の崩壊とともに滅びた呉鳳伝説が、なぜ朝鮮と台湾に長いあいだ存続しつづけてきたのだろうか。

その前に、戦後につづく韓国国定教科書の呉鳳の話はいかなるものであろうか。またそれがどのように受容・解釈されたのだろうか。以下、高等学校国語に掲載された呉鳳伝説の全文を翻訳・紹介する。

高等学校国語（第三・四次教育課程期、一九七五年〜一九八九年）

いかに生きるか。

孫　明鉉

「いかに生きるか」

この問いは実践の問題である。したがって、それを言う人自身がその言葉とおりに実践窮行しないかぎり、千万の

言葉を並べ立てたとしても答えにはならない。

「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」

これは孔子の言葉で、人々はこの言葉を「いかに生きるか」のよい答えとして信じてきた。しかし、昔の普通の儒生でもこの程度の言葉は口に出来ただろうし、実際に口にもしたであろう。しかし、孔子のこの言葉だけがそれに対する答えとして信じられてきたのは何故であろう。それは孔子の実践窮行を考えざるをえない。

数年前、私は五台山に行ったことがある。そこには名刹の月精寺と上院寺がある。月精寺は一度焼かれて新たに建てられたので昔の痕跡をみることができなかったが、上院寺は昔のままに残っていた。私はそこで、上院寺が朝鮮動乱の中でもそのまま残された由縁を聞いた。

上院寺は方漢岩禅師が住職として命を終えた場所である。朝鮮戦争の時であった。国軍は南進する侵略軍を撃退して北上したが、中共軍の介入で撤退せざるをえなくなった。その時、国軍はこの二つの寺が敵に有利な掩蔽物になるので作戦上焼かざるを得なくなった。それで国軍はまず月精寺を焼き、上院寺の僧たちにも避難するよう伝えた。方住職は寺の放火に何日間の猶予を願い出た。その間、住職は寺の僧たちを避難させ、一人で残っていた。放火の約束の日に国軍が寺に赴くと、住職は椅子に端座したまま絶命していた。その荘厳な光景を目の当たりにした国軍は放火を断念し、そのまま撤退せざるをえなかったという。それで上院寺は焼かれずに残ったのである。

作戦上からすれば、寺を守る住職にも、寺を焼かずに撤退した国軍にも問題がないとはいえない。しかし、信念のために身命を賭けた住職の貴い行動、また軍人としては間違ったとしても住職の貴い行動に敬意を表して寺を焼かなかった軍人たちのいとも人間的な行動は、私たちに感動を与えるとともに、「いかに生きるか」ということを暗示してくれる。

私が幼い時に読んだ呉鳳の話も、思い返すたびにこうした感動と暗示を与えてくれる。昔、台湾の山間には人の首

を刎ねて祭祀を行う風習があった。しかしその中でも、阿里山の土人たちは他の土人たちより先にこの悪習を捨てたが、それは呉鳳という人の殺身成仁の結果であった。

呉鳳は中国から渡ってきた宣教師で、阿里山の土人たちの教化に勤め、ついには彼らの酋長として推戴された。土人たちは呉鳳を神様のように崇め、慕った。しかし、その悪習はどうしても捨てようとしなかった。呉鳳は仕方なく、来年は許すので今年だけは我慢するように説得した。それで一年を無事に過ごした。そして翌年もそうしてまた一年を無事に過ごした。しかし三年目にはまったく聞き入れられず、反乱でも起こしそうな勢いであった。その時、呉鳳は某日何時に或るところに行けば、赤い帽子をかぶって赤い服を着た旅人が通り過ぎるのでその人の首を刎ねて祭祀をするようにと指示した。土人たちは悦んで、指定の日時に指定の場所に行ってみるとはたして酋長の言ったとおりの旅人がいた。それでなにも考えずに首を刎ねてみると、それがほかではなく彼らが神様のように崇拝して慕った呉鳳ではないか。彼らは大声痛哭し、旧来の悪習を捨て、それ以降、呉鳳の忌日になると赤い服を着て彼の徳を慕ったというのである。

呉鳳の行動が最善の道であったかどうかについてはさまざまな意見もあろう。しかし、教えを実行して生命を草芥のように捨てた彼の貴い行動は私たちに大きな感銘と、いかに生きるかについて暗示してくれる。

人類歴史上、いや我が国の歴史だけでもこのような殺身成仁を遂げた人たちは数多ある。同時にそれとは反対の場合もある。「君子は義に喩り、小人は利に喩る」というが、私たちがすでに提起した「いかに生きるか」という問題も結局は、君子の道を歩むか小人の道を歩むかという問題に帰結するといえる。

しかし、このような問題を提起し、千万の言葉で答えたとしてもそれになんの意味があろう。方漢岩のように、呉鳳のように実践しない限りでは……。（全文翻訳）

朝鮮戦争のしばらく後、韓国の教科書に再登場した呉鳳伝説であるが、それは従来とはやや枠組を変えている。細部において多くの変容が認められる。まず、題目として、従来の歴史伝記風の「呉鳳」ではなく、「いかに生きるか」という生き方への本質的な問いと主張に変えられた。作者の伝聞によるエッセイ形式で、全体として人生観の強い主張になっているのである。戦前の呉鳳が、歴史的な逸話（あるいは教訓話）であるとすれば、戦後のものはそれに止まるのではなく、殺身成仁という教育指標の「実践」を主張している。構成においても、呉鳳だけではなく、朝鮮戦争時の方漢岩住職の逸話まで組み込まれ、一層強い「実践」が要求されている。ほかにも細部において多くの異同がみられる。

戦前ではなぜか「亜里山」になっていたが、それが「阿里山」に変えられ、「蕃人」が「土人」に、首狩の期間も変えられている（戦前は四〇年余りにさらに三年延期させたが、戦後は二年間だけ延期させている）。また、呉鳳が戦前では亜里山の国籍不明の「役人」であったが、それが中国から渡った「宣教師」に変えられ、さらに呉鳳は先住民の「酋長」に推戴されたことになっている。さらに、呉鳳は生存時から「神様のように崇め」られ（戦前では「親のやうにしたはれ」たとされている）、呉鳳の忌日になると赤い服を着て彼の徳を慕った（戦前には死後神に祭ったという）というようにつけ加えられている。ほかにも先住民の首狩への強い要求が戦前では「もうどうしても待ってゐられません」という表現に止まっていたが、戦後では土人たちが「反乱でも起こしそうな勢いであった」と具体的に強調されている。

このように、戦後の韓国における呉鳳伝説は、戦前のものとはやや違う形で再受容されている。構成においても内容においてもストーリが強化されている。それでは、帝国の当事者であった日本では消滅した呉鳳の話が、なぜ戦後の韓国（あるいは台湾）に再受容され続けてきたのであろうか。いかにも日本帝国の植民地政策用だったものがいかなる理由によって旧植民地に継続していったか、ということである。そこには受容と変容による旧植民地の戦後的な政治性があり、それによって植民地主義を再生産する内部要因がある。

四、呉鳳伝説の政治性と植民地主義

すでに指摘したように、戦後の台湾での呉鳳伝説の継続的な受容は、戦後台湾の政治性と切り離して考えることができない。国民党一党支配体制を長く敷いてきた台湾では、いわゆる本省人と外省人の対立が存在してきた。そして呉鳳伝説は漢族系の外省人による支配体制にも好都合のものであったと思われる。つまり、戦後の台湾の政治性が呉鳳伝説をみずから要求したのである。戦前の植民地主義と戦後の政治との共謀関係が成立していたといえる。同様のことは朝鮮・韓国にも当てはまる。

呉鳳伝説は戦後の韓国において大きく変容したが、まず呉鳳が宣教師に変えられたことの意味である。国籍不明の役人（だから日本人も可能であった）から宣教師への書き替えであるが、宣教師というのは一般的にキリスト教の布教に関わる西洋人のイメージが強い。宣教師による「土人」の教化という、いかにも西洋植民地主義の装いを呈しているのである。役人と先住民の関係が西洋人宣教師と「土人」の関係に変えられることで、台湾に住んでいる人はことごとく「土人」というイメージが強められている。さらに呉鳳が「土人」の「酋長」に推戴され「神様」のように崇められたというのである。役人が「酋長」に変えられているが、なぜ呉鳳が「土人」によって「酋長」に推戴されたのか、必然的な理由は存在しない。西洋人宣教師が「土人」の住む南方の島に行き「土人」を教化し、「酋長」になったというような設定である。西洋、あるいは一九二〇年代の日本の、南方に対する植民地主義の典型的な姿を踏襲するものといえる。当然ではあるが、戦後の韓国における呉鳳伝説は必ずしも戦後的な文化状況から発生したものではない。戦前からの、帝国の視点を胚胎したものである。宣教師による南方の島での「土人」の教化、「土人」の暴力性と宣教師の文化性などは、日本帝国のもっと

もありふれた大衆文化現象でもあったのである。つまり、孫明鉉による呉鳳伝説のさらなる変容は、帝国に蔓延した日本的な植民地主義の一姿なのである。帝国の植民地主義は植民地においてもっとも強化され、植民地はそうした帝国の植民地主義が氾濫する場所だったのである。つまり、戦後の韓国における呉鳳伝説のいびつな変容は、植民地主義がもたらしたもっともグロテスクな姿であると同時に、旧植民地に内在する植民地主義の一証左である。旧帝国が戦後に古い植民地主義と表面的に決別していくのに対し、旧植民地はそれを遺産として保持していたのである。台湾と朝鮮において呉鳳伝説が生き残る根拠がそこにあったといえる。近代国家を目指す旧植民地の政治性が遺産の保持と再生産を内的に要求していたのである。

孫の呉鳳伝説はいうまでもなく、旧来のものを借り、新たな戦後的な伝説をつけ加えたものである。そのなかで、もう一つの伝説として朝鮮戦争時の方漢岩禅師の死がつけ加えられる。国軍（韓国軍）に協力する方禅師の死が呉鳳の死と重ねられているのである。同時に、寺を焼かなかった国軍の行為も、いちおうは呉鳳の線上にあるものとして讃えられている。方禅師の死にまつわる国軍の行為、さらにその延長で想定される朝鮮戦争時における国軍兵士の戦死なども、暗に殺身成人の「実践」を暗喩するものになっている。つまり、呉鳳の死は方禅師の死と同列のものであり、国軍の行為もそれに類似するものとして想定され、その延長線で国軍兵士の戦死が想定されているのである。殺身成仁の「実践」による愛国犠牲主義の再生産であるといえよう。呉鳳伝説は、分断国家である韓国の、いわば愛国犠牲主義の教材になり近代国民国家の枠組のもと機能していたのである。旧植民地の近代国家建設のための、内部的な必然性から呉鳳神話は再利用され、またそれに合致するようにさらなる変容が要求されたといえる。そのような事情は台湾においても同様であったと思われる。

五、終わりに

以上、呉鳳伝説の台湾での受容過程を概観したうえ、朝鮮での受容過程について考察した。それを簡略に整理すると、呉鳳伝説は台湾の教材で最初に扱われ、それが日本に受容され、さらに植民地朝鮮の教科書にも受容された。その過程で呉鳳伝説は大日本帝国の共通の美談話として共有されてきた。しかし、台湾と朝鮮においては戦後さらなる変容を経て存続しつづけた。それには戦後的な政治性が強く関係している。呉鳳伝説のもつ重要な文化的意味は戦後においても旧植民地の朝鮮と台湾にそのまま受容され、あるいは変容する形で存続しつづけてきたことである。大日本帝国の植民地政策的な意図を強く胚胎したものが、戦後における旧植民地の政治的・文化的な状況のなかで、内発的に要求されたのである。というのは、戦後における植民地主義は必ずしも旧帝国ではなく、被植民地もしくは旧植民地国家によってさらに強化された側面があることを示している。植民地という制度が終わっても旧植民地の内部構造として植民地主義は維持されつづけ、さらには内部の伝統として定着していくのである。そうした呪縛される連鎖の過程こそ、いわゆる新植民地主義ともいえよう。

二〇〇二年版『読み返す国語〔高等学校〕』の編集「はしがき」には、再録した内容を「あなたに最も大事なもの、一生をおいて忘れられないものとして息吹つづける」「まさにあなたの最も純粋な青春の光」であると意義づけている。呉鳳伝説に限っていえば、編集者のいう「あなた」こそまさに旧植民地国家自身であり、「最も大事」で「最も純粋な青春の光」こそ内部に刻印された植民地主義であろう。そうした構造が旧植民地国家には近代の原体験として果てしなく反復・再生産されているように思われる。

注

(1)高等学校『国語1』(第三・第四次教育課程期、一九七五年〜一九八九年)。第三次教育課程は一九七四年に、第四次教育課程は一九八一年にそれぞれ公布された。教育課程の公布と教科書が実際に使われる期間には若干のずれがあるが、本論では使用期間を重視した。

(2)『読み返す国語〔高等学校〕』(知識工作所、二〇〇二年、ソウル)

(3)駒込武は「植民地教育と異文化認識――「呉鳳伝説」の変容過程」――」(『思想』第八〇二号、一九九一年四月)のなかで、呉鳳に関する記述を「伝記」ではなく、様々な変容過程を経た「伝説」として捉えている。本論もこれに従った。

(4)注(3)に同じ。それを改稿して収録したのが『植民地帝国日本の文化統合』(岩波書店、一九九六年)。本論での台湾における「呉鳳伝説」に関する記述はおもにこれらを参照した。

(5)注(3)に同じ。

(6)注(3)に同じ。

(7)『立法院公報』(第七六巻第四三院会記録、一九八七年五月)。駒込武『植民地帝国日本の文化統合』(岩波書店、一九九六年)からの再引用。

30. 어떻게 살 것인가

손 명 현 (孫明鉉)

"어떻게 살 것인가?"

이 물음은 실천(實踐)의 문제(問題)다. 그러므로, 말하는 사람 자신(自身)이 그의 말대로 실천 궁행(實踐躬行)하지 않는 한(限) 천만 어(千萬語)를 나열(羅列)한다 해도 대답(對答)이 되지 않을 것이다.

"아침에 도(道)를 들으면 저녁에 죽어도 좋다."[1]

이 말은 공자(孔子)가 한 말로, 사람들은 이 말을 어떻게 살 것인가에 대한 훌륭한 대답으로 믿어 온다. 그러나, 옛날의 웬만한 유생(儒生)들이라면, 이 정도(程度)의 말은 누구나 할 수 있고, 또 하기도 했을 것이다. 그런데도 유독(唯獨) 공자의 말만이 그 대답으로 믿어지는 것은 무슨 까닭인가? 공자의 실천 궁행을 생각지 않을 수 없다.

수 년 전(數年前)에 나는 오대산(五臺山)엘 간 일이 있다. 거기는 유명한 고찰(古刹) 월정사(月精寺)와 상원사(上院寺)가 있다. 그런데, 월정사는 불탄 뒤에 새로 지었기 때문에 옛 모습을 볼 길 없었으나, 상원사만은 그대로 남아 있었다. 나는 거기서, 이 절이 그 전란(戰亂) 속에서도 그대로 남게 된 연유(緣由)를 들었다.

상원사는 방 한암(方漢巖) 선사(禪師)가 주지(住持)로서

주

(1) 朝聞道夕死可矣. 〈논어(論語)〉

〈参考資料一〉『国語１』(高等学校一年生用、一九八三年三月発行、韓国文教部)

생명(生命)을 마친 곳이다. 6·25 사변(事變) 때였다. 국군(國軍)은 남침(南侵)하는 침략군(侵略軍)을 격퇴(擊退)하여 북상(北上)했다가, 중공군(中共軍)의 개입(介入)으로 후퇴(後退)하게 되었다. 그 때, 국군은 이 두 절이 적군(敵軍)에게 유리(有利)한 엄폐물(掩蔽物)이 되기 때문에 작전상(作戰上) 불태우지 않을 수 없는 처지(處地)에 있었다. 그래서, 국군은 월정사를 불태우고, 상원사로 가 스님들을 피하라고 했다. 방 선사(方禪師)는 며칠 동안의 유예(猶豫)를 청했다. 그 동안 선사는 스님들을 모두 하산(下山)시키고 혼자 남았다. 약속(約束)한 날에 국군이 가 보니, 선사는 의자에 단좌(端坐)한 채 절명(絕命)해 있었다. 그 장엄(莊嚴)한 광경(光景)을 본 국군은 그대로 후퇴할 수밖에 없었다. 그래서, 상원사는 남은 것이다.

작전(作戰)하는 처지에서 보면, 절을 수호(守護)한 선사

상 원 사

(禪師)에게나 절을 불태우지 않은 군인(軍人)들에게나 우리는 다 같이 할 말이 있을 것이다. 그러나, 신념(信念)을 위하여 신명(身命)을 도(賭)한 선사의 높은 행동(行動), 그리고 비록 군인으로는 잘못이라 할지라도, 그 높은 행동 앞에 옷깃을 여미고 떠난 그 군인들의 가장 인간적(人間的)인 행동은 우리에게 큰 감명(感銘)과 함께, 어떻게 살 것인가에 대한 암시(暗示)를 줌에 족하지 않은가.

내가 어려서 읽은 오 봉(吳鳳)의 이야기도, 생각할 때마다 이런 감명과 암시를 준다. 옛날, 타이완(臺灣)의 산간(山間)에는 사람의 목을 베어 제사(祭祀)를 지내는 풍습(風習)이 있었다. 그런데, 그 가운데 아리산(阿里山)의 토인(土人)들은 다른 데 사는 토인들보다 앞서 이 악습(惡習)을 없앴는데, 그건 오 봉이란 사람의 살신(殺身)한 결과(結果)였다.

오 봉은 중국(中國)에서 건너간 선교사(宣敎師)로, 아리산 토인들의 교화(敎化)에 힘썼는데, 나중에는 그들의 추장(酋長)으로 추대(推戴)되었다. 토인들은 오 봉을 하느님같이 숭배(崇拜)하고 따랐다. 그러나, 그 악습을 버리자는 말은 듣지 않았다. 오 봉은 하는 수 없이, 내년(來年)에는 허락(許諾)할 테니 금년(今年)만은 참으라고 했다. 그래서, 1년을 무사(無事)히 지냈다. 그리고, 다음 해도 그렇게 해서 또 1년을 넘겼다. 그러나, 3년째는 듣지 않을 뿐만 아니라, 반란(叛亂)이라도 일으킬 기세(氣勢)였다. 그 때 오 봉은, 그들에게 아무 날 아무 때 아무 곳에 가 보면 붉은 모자를 쓰고 붉은 옷을 입은 나그네가 지나갈 것이니, 그의 목을 베어 제사

(祭祀)를 지내라고 했다. 토인들은 좋아하며 그 날 그 때 그 곳으로 가 보니, 추장(酋長)이 말한 대로 그런 나그네가 있었다. 이에 그들이 아무것도 살피지 않고 그의 목을 베고 보니, 그가 바로 하느님처럼 숭배(崇拜)하고 따르던 오 봉이 아닌가. 그들은 대성 통곡(大聲痛哭)을 하고, 재래(在來)의 악습을 청산(淸算)했으며, 그 후로 오 봉의 기일(忌日)이 되면 붉은 옷을 입고 그의 덕(德)을 추모(追慕)한다는 것이다.

아리산의 신목(神木)

오 봉의 행동이 최선(最善)의 길이었던가에 관해선 서로 다른 의견(意見)이 나올 수도 있을 것이다. 그러나, 가르침을 펴고자 생명을 초개(草芥)처럼 버린 그의 거룩한 행동은 우리에게 큰 감명(感銘)과, 어떻게 살 것인가에 대한 암시를 줌에 부족(不足)함이 없을 것이다.

인류 역사(人類歷史), 아니 우리 나라의 역사(歷史)만 보아도 위와 같이 살신성인(殺身成仁)한 분들을 허다(許多)하게 찾아볼 수 있다. 그와 동시에, 그 반대(反對)의 경우(境遇)도 찾아볼 수 있다. 군자(君子)는 의(義)에 민첩(敏捷)하고, 소인(小人)은 이(利)에 민첩하다고 하거니와, 우리가 위

에서 제기(提起)한 바 '어떻게 살 것인가' 하는 문제도, 결국은 군자의 길을 걸을 것인가, 소인의 길을 걸을 것인가 하는 문제에 귀결(歸結)된다고 할 것이다.

그러나, 이런 문제를 제기하고 천만 마디로 대답한다 한들 그것이 무슨 소용(所用)이 있는가? 방 한암처럼, 오 봉처럼 실천(實踐)하지 않는 한…….

域綿

賀易甚盛

灣祭供

止

揚子江ノ流域ハ地味スコブルコエ、米・茶・綿等ノ産物多シ。又沿岸ニハ上海・漢口等アリテ、我ガ國トノ貿易甚ダ盛ナリ。

第六　吳鳳

臺灣の蕃人には、お祭に人の首を取つて供へる風がありますが亞里山の蕃人にだけは、此の惡い風が早くから止みました。これは吳鳳といふ人のおかげだと申します。

吳鳳は今から二百年程前の人で、亞里山の

惡

役人でした。大そう蕃人をかはいがりましたので、蕃人からは親のやうにしたはれました。吳鳳は役人になつた時から、どうかして首取の惡風を止めさせたいものだと思ひました。ちやうど蕃人が、其の前の年に取つた首が四十餘ありましたので、それをしまつて置かせて、其の後のお祭には、毎年其の首を一つづつ供へさせました。

四十餘年はいつの間にか過ぎて、もう供へ

許爲殺說

る首がなくなりました。そこで蕃人どもが呉鳳へ、首を取ることを許してくれといつて出ました。呉鳳はお祭の爲に人を殺すのはよくないといふことを說き聞かせて、もう一年、もう一年とのばさせてゐましたが、四年目になると、

「もう、どうしても待つてゐられません。」

といつて來ました。呉鳳は

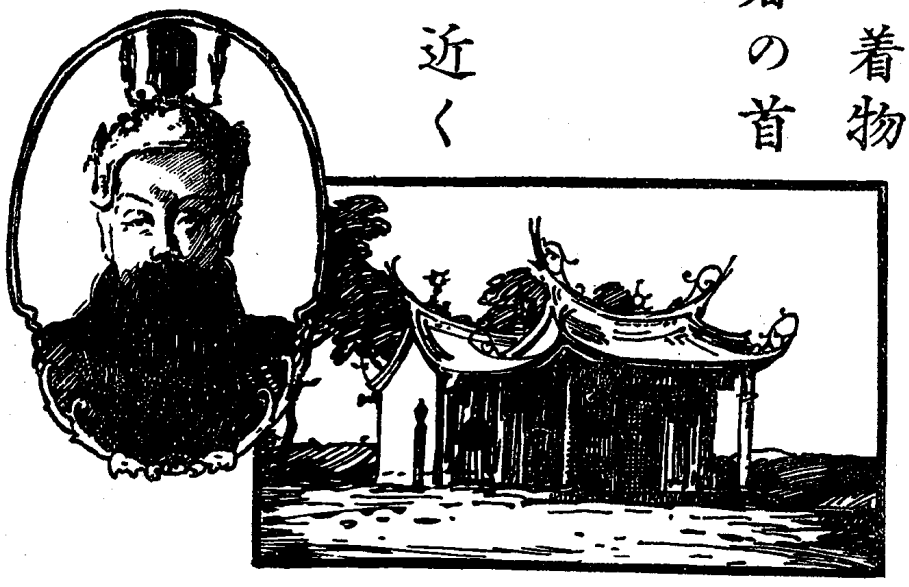
「それ程首がほしいなら、明日の晝頃、赤い

帽

帽子をかぶつて、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ」。

といひました。

翌日番人どもが、役所の近くに集つてゐますと、果して赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着た人が來ました。待ちか



まへてゐた蕃人どもは、すぐに其の人を殺して、首を取りました。見ると、それは呉鳳の首でございました。蕃人どもは聲を上げて泣きました。

さて蕃人どもは、呉鳳を神にまつつて、其の前で、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。さうして今も其の通りにしてゐるのだといひます。

第七　圖書館